

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：32521

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531262

研究課題名(和文) 子ども参加型援助チームモデルの開発 - 発達障害がある子どもの援助に焦点をあてて -

研究課題名(英文) Development of student-participated support team : focus on child's support with developmental disability

## 研究代表者

田村 節子 (TAMURA, Setsuko)

東京成徳大学・その他部局等・教授

研究者番号：40549151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は子ども・保護者・教師・コーディネーターらからなる「子ども参加型援助チームモデル」を開発しわが国の実情に合った援助方法を展開するための基盤となる研究を行うことを目的とした。LD, ADHD等の当事者のインタビューで得られたデータを質的に分析した結果、子どもは欲求のみを意識しているためwantsとneedsを子どもと話し合い折り合うための過程が必要であることが明らかとなった。コーディネーターには、子どもの感情に注意を払い子どもの主体性を尊重しながら、子どものWANTSとNEEDSのアセスメント、NEEDSの確認、子ども参加型援助チームにおけるリーダーシップの役割を担う必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research has developed "student-participated support team model" which consists of child, guardian, teacher, and coordinators. The object of this study is to become a foundation supporting method which matches the real state of affairs of our country. The results of qualitative analyses of the interview with LD or ADHD persons revealed that a child considered only WANTS. We therefore need the process to discuss WANTS and NEEDS with a child, and to accord with them. Additionally, we indicated that coordinators should (1) assess child's WANTS and NEEDS, (2) confirm child's NEEDS, and (3) assume leadership in a student-participated support team.

研究分野：学校心理学

キーワード：特別支援教育 学校心理学 子ども参加型援助チーム 子ども・保護者・教師 コーディネーター 相互コンサルテーション 個別の援助チーム

1. 研究開始当初の背景

「援助チーム」は学校心理学において理論的・実践的基盤となっている中核の概念である。当事者を援助チームメンバーに加えるという視点は、子どもにぴったり合った援助を提供するためには欠かせない。しかし、IEPを作成する会議に保護者が参加するアメリカでも、子どもの参加は難しく(水谷, 柳本, 2002) いまだ課題とされていた。

2. 研究の目的

本研究では、発達障害がある子ども・保護者・教師・コーディネーターらからなる「子ども参加型援助チームモデル」“student-participated support team” (SPST)を開発し、わが国の実情に合った当事者を含めた新しい援助方法を展開するための基盤となる研究を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

研究1では教師1,057名にアンケート調査を行った。研究2ではLD, ADHD等の当事者へ回顧法によるインタビュー調査を行った。研究3では、援助チームの実践経験のある教師6名へのインタビュー調査を行った。

4. 研究成果

研究1 教師の援助チームの必要性に関するアンケート調査

- ・調査対象者 教師1,057名(教師歴10年以上946名、10年未満111名、地域は全都道府県)
- ・調査時期 2012年7~9月中旬、
- ・手続き 全国の東書Eネット登録者へWEBにて質問紙を一斉配信(東京教育研究所, 2013)。

教師に対する生徒指導や教員生活に対する悩みのアンケートを実施した。自由記述をKJ法にならって分析した結果、支援体制の確立や教員間の連携、教員の負担、管理職やベテラン教師の若手への配慮不足、保護者対応の困難さや若手教員の育成などが課題として上げられた。教員の負担の軽減や教員自身も成長可能な効率のよい援助チームの必要性が明らかとなった。

研究2 発達障害のある子どもへの援助ニーズに関するインタビュー調査

LD, ADHD等の当事者団体の協力を得て、回顧法にて大人の当事者へインタビュー調査を行った。発達障害が発見されずに過ごした小学生・中学生時の援助ニーズを明らかにする予備的研究を行った。

- ・調査対象者 某発達障害者当事者の会所属A(40代男性) 社会貢献ショップ経営B(30代女性)
- ・調査時期 201X年+1年7・9月
- ・手続き 発話はすべてICレコーダーで録音し得られたデータはすべて逐語に起こしMAXqda (Sozialforschung GmbH社)にて

質的分析を行った。

文書概観表示を分析した結果、「子どもの頃の困難さや欲求■(A, 44%, 58%)」、「子どもの頃に意識されていない(大人になって意識された)援助ニーズ■」(A30%, B28%)、「子どもの頃に感じた自分自身のよかったことや長所■」は(A12%, B8%)、「国レベルで必要なシステム■」は(A13%, B5%)であった。この結果からも、発達障害のある子どもにとっては、学校生活において「子どもの頃の困難さや欲求」が大きな割合を占め、援助ニーズは子どもの時には意識できにくいことが明らかとなった(Figure 1)。

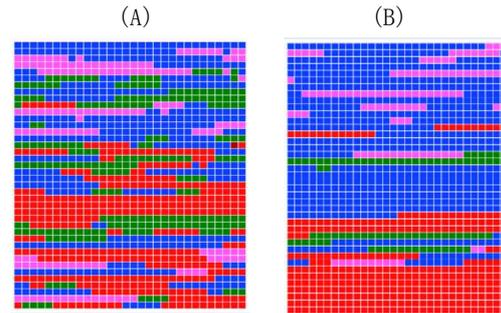


Figure 1 文書外観表示

子どもの頃に意識された欲求(wants)」と、「子どもの頃に意識されていない(大人になって意識された)援助ニーズ(needs)」の例をTable1に示す。

Table1 子どもの頃に意識されたwantsと意識されていないneedsの例

発話例	意識されたwants	意識されていないneeds
学校はアウェイ	学校のルールに合わせた い(できないことだらけ)  いじめられたくない (子どもは困難さを伝えられない SOSを出す余裕がない)	その子にあった選択肢  学校内外の避難場所 (内面の言語化)
	一斉授業でわかりたい 得意なことを発揮したい (でも出る杭は打たれる)	放課後に個別授業 親や教師が長所を活用

子ども参加型援助チームでは、子どもが納得する援助ニーズ(needs)を定めることは必要条件となる。しかし、子どもは欲求wantsのみを意識しているため、子ども参加型援助チームでは、wantsとneedsを子どもと話し合い折り合うための過程も必要であることが示唆された。そのためには、課題解決のためのアセスメントが重要であり、子どもの表に現れているwantsの意味(内面のwants)を援助者へ伝え、保護者や教師が子どものwantsを理解した上で、援助ニーズを確定することがSPSTで行う援助の鍵となることが示唆された。

研究3 子ども参加型援助チームにおけるコーディネーターの役割に関するアンケート調査

- ・調査対象者 元養護教諭1名・元校長3名教育委員会所属1名・教頭1名
- ・調査時期 201X年+2年1月中旬
- ・手続き 発話はすべてICレコーダーで録音し得られたデータは逐語に起こし現象学的分析プロセスを応用し重要な部分を抽出し意味の解釈を行った。さらに解釈した意味をテーマ群にまとめ現象の本質的な構造を記述する手法を用いた。

子ども参加型援助チームが促進されるためにコーディネーターに求められる活動内容として、「本音で話し合う」「本質を捉える」「本気で関わる」の3つの大カテゴリーが抽出された。子ども参加型援助チームが促進しづらいコーディネーターの活動内容としては、「形骸化(情報交換のみ)」「コミュニケーション不足」「学校全体の問題という意識不足」の3つの大カテゴリーが抽出された。

コーディネーターには後者の課題を意識しつつ前者のカテゴリーを実践する役割が求められることが明らかとなった。

総合考察

(1) 子ども参加型援助チームモデルと先行研究の比較

アメリカ合衆国における Person-centered planning (PCP) と従来の ITP ミーティングの比較表に本研究結果から「子ども参加型援助チームモデル」(figure2) の活動内容を加え比較検討した。

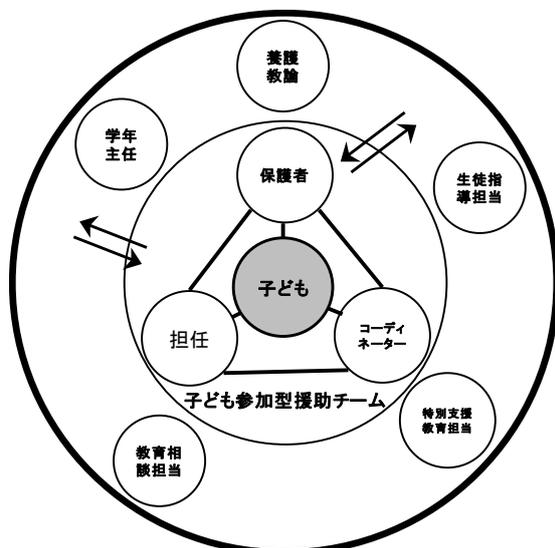


Figure2 子ども参加型援助チーム (SPST) 例

PCP、ITP と本研究の子ども参加型援助チーム (SPST) を比較すると、すべての活動において違いがみられた。SPST では常に子どもが主役である。ミーティングの進行はコーディネーターが行うがチームメンバーは対等である。方向性としては、PCP では生徒のもつ力に基づき、ITP では生徒のもつニーズに基づくが、

SPST では子どもの自助資源と援助ニーズに基づく。生徒の役割としては、PCP では注目の的であり、ITP では消極的なサービスの受け手であるが、SPST では子どもはチームメンバーと一緒に相互コンサルテーション (対等な話し合い) を行い、決定した援助案について実行する。他のメンバーも自分が該当する援助案の箇所について実行する。さらにその結果については SPST では子どもだけではなくチームメンバー全員が責任を共有する。誰かひとりに責任を負わず全員が責任を共有し細やかに援助するという形態が、日本の学校現場にあった援助方法のひとつであると言える。

(2) 子どもの wants と needs を考慮したコーディネーターの役割

研究2・3の結果から、子ども参加型援助チームにおけるコーディネーターは子どもが援助チームに参加する前に子どもの WANTS を十分聞いた上で NEEDS を確認し、WANTS と NEEDS を折り合う過程を設定しリードする役割も担う必要性が明らかとなった。needs を定めるためには、子どものカウンセリングニーズとコンサルテーションニーズについてのアセスメントをコーディネーターが担う必要性も示唆された。さらに、wants の意味や援助ニーズを理解するために、保護者や教師など援助チームメンバーが、発達障害や心理学、教育等の専門知識を幅広くもつことも重要であることが示唆された。

(3) 子どもの学校生活の質 (Quality of school life) 向上のためのパッケージ

本研究の過程で下記のシート類を試作した。(成果公開 HP よりダウンロード可)。

① スクール・セーフティネット・チェックシート (School Safety Net Check sheet)

先生と生徒の会話頻度をもとに生徒の人的なセーフティネットを知り子どもの援助ニーズへの対応を考えるシート。

② 睡眠&生活チェックシート

ネットやスマホに使用している時間や睡眠時間など自分の生活時間についてふり返って記入し子どもが生活時間を客観的に見つめるためのシート。

③ 援助ニーズレベルチェックシート

通知表の評定欄等をもとに生徒の援助ニーズレベルを客観的に知るためのシート。

④ WANTS (Wants and Needs Thinking sheet)

子どもと話し合い子どもの意識されている欲求 (WANTS) から子どもの援助ニーズ (NEEDS) を確認するシート。

⑤ 子ども参加型援助チームシート

子どもの援助ニーズや子どもの自助資源等をもとに援助案を考え実行するためのシート。

(4) 今後の課題

「子ども参加型援助チームモデル」を基盤とした包括的な校内援助システムを開発し、発達障害のある子ども達やその傾向のある子ども等の学校生活の質の向上を目指すことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 田村節子 学校に対して要求が強い母親が子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか—母親のインタビューの質的分析—日本学校心理学会年報, 査読有, 2013
- ② 田村節子 「児童・生徒理解」のためにできること 教員養成セミナー, 時事通信社, 査読無, 2014, 4, P8-9.
- ③ 田村節子 悩みを話せる子-援助を求める力をどう育てるか, 児童心理, 金子書房, 査読無, 2014, 68 (10) 47-51.
- ④ 齋藤真衣・田村節子 子どもの問題状況を教師から伝えられたとき保護者はどう感じたのか—円滑な連携につながる「伝え方の検討—東京成徳大学臨床心理学研究, 査読無, 2015, 15, 28-38.
- ⑤ 田村一明・田村節子 現役中学生は学級の人間関係と自己の位置づけをどのように認知し変化させていくのか 東京成徳大学臨床心理学研究, 査読無, 2015, 15, 146-155.

[学会発表] (計 5 件)

- ① Junko Iida・Setsuko Tamura・Toyokazu Yamaguchi Japanese teachers' behaviours for Building partnership with studentsparents (Porto)2013
- ② Setsuko TAMURA, Sanae IECHIKA, Toshinori ISHIKUMA, Condition of success for forming a student-participated support team: Qualitative analysis of retrospective interviews with persons with developmental disabilities. ISPA(Vytautas Magnus University) 2014
- ③ Sanae IECHIKA , Setsuko TAMURA, Toshinori ISHIKUMA How do the school support coordination committees become "real team": Roles of special needs education coordinator for effective support to children. ISPA(Vytautas Magnus University) 2014
- ④ 田村節子・家近早苗・石隈利紀 子ども参加型援助チームに子どもが望むこと～成人になってから発達障害が分かった人の語りから～日本 LD 学会 2014 (和歌山大学)
- ⑤ 田村節子・渡部雪子・菊池春樹・根津克己・西村昭徳・新井邦二郎 学生の困り感に対する援助モデルの作成および援助活動報告 日本学校心理学会 2014 (玉川大学)

[図書] (計 3 件)

- ① 田村節子・石隈利紀 実践チーム援助-特

別支援教育編-図書文化, 2013

- ② 水野治久・石隈利紀・田村節子・田村修一・飯田順子 よくわかる学校心理学 ミネルヴァ書房, 2013
- ③ 東京教育研究所・石隈利紀・田村節子 豊かな学校生活のために 機関誌エディフロント 東京書籍 2013

[その他]

ホームページ

<http://www.tsu-itc.org/kaken/s-tamura2014/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村節子 (SETSUKO TAMURA)  
東京成徳大学・教授  
研究者番号: 40549151

(2) 研究分担者

家近早苗 (IECHIKA SANAE)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号: 40439005

石隈利紀 (ISHIKUMA TOSHINORI)  
筑波大学・  
研究者番号: 50232278

水野治久 (MIZUNO HARUHISA)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号: 80282937

牟田悦子 (MUTA ETSUKO)  
成蹊大学・文学部・教授  
研究者番号: 90276650